

スポーツサングラス市場をけん引、創業100年を超える山本光学の
経験とノウハウ

SWANS

JAPANESE QUALITY

ランニングやマラソン時にスポーツサングラスをする人が増えている。紫外線から目を守ったり、集中力を高めたりといった効果が期待されているからだ。

普及のきっかけとなったのが1992年のバルセロナ五輪。有森裕子氏が女子マラソンで銀メダルを獲得した際、サングラスをしていたことが話題になったのだ。



有森 裕子氏が着用したモデル

そのとき有森氏がかけていたのが、大阪に本社を置く山本光学のスポーツサングラス「SWANS（スワンズ）」だ。

透明性や耐衝撃性に優れたポリカーボネート製のレンズは紫外線を99.9%以上カットするうえ、スポーツに求められる高い強度を実現。さらにレンズとフレームの一貫生産により、日本人の顔の骨格にジャストフィットする形状に仕上げられている



石川遼氏の要望を取り入れて開発された2018年新製品『SPRINGBOK（スプリングボック）』

そんなSWANSの技術力のベースにあるのが、創業100年を超える山本光学の経験とノウハウだ。1911（明治44）年に眼鏡レンズ加工業として創業した同社は、戦前から工場従事者用に防塵メガネを開発してきた歴史を持つ。

「戦時中にはフレームの原料であるセルロイドを井戸に入れて戦火を逃れ、戦後は奇跡的に残ったその原料で水中メガネを製造・販売するようになりました」と4代目社長の山本氏は話す。

1946年、当時高級品の代名詞だった“白鳥”にあやかり、商品名を「スワン印水中メガネ」と命名。その後SWANSブランドのスキーゴーグルを発売。1972年の札幌冬季五輪でSWANSの知名度が一気に高まったという。



1946年に水中メガネを発売した際に誕生した「スワン印」が掲載された新聞広告

そして、1992年のバルセロナ五輪の際には、日本陸上競技連盟から「選手が着けるマラソン用のサングラスをつくってほしい」と要請が入る。現地の強い日差しを防ぎ、快適に走れる機能が求められたほか、有森氏からは「ライバルに目の状態を悟られないようなレンズにしてほしい」と要望があったという。

同社は選手の声の商品開発に取り込みながらニーズに応えるサングラスを開発。見事、有森氏の銀メダル獲得に貢献したのだ。この時の製品開発は、2004年アテネ五輪女子マラソンで金メダルを獲得した野口みずき氏の着用モデルへとつながっているという。



2018年新製品「SPRINGBOK（スプリングボック）」を着用した石川遼氏

さらに2008年以降、プロゴルファーの石川遼氏をアドバイザースタッフに迎え、ゴルフ用のサングラス市場が急拡大していく。

こうしてトップアスリートを起用することでブランド認知度の向上につなげると共に、「選手の意見を商品開発の現場にフィードバックしてノウハウを蓄積し、それを一般向けの商品に注入して市場を切り拓くのが当社の戦略だ」と語る。

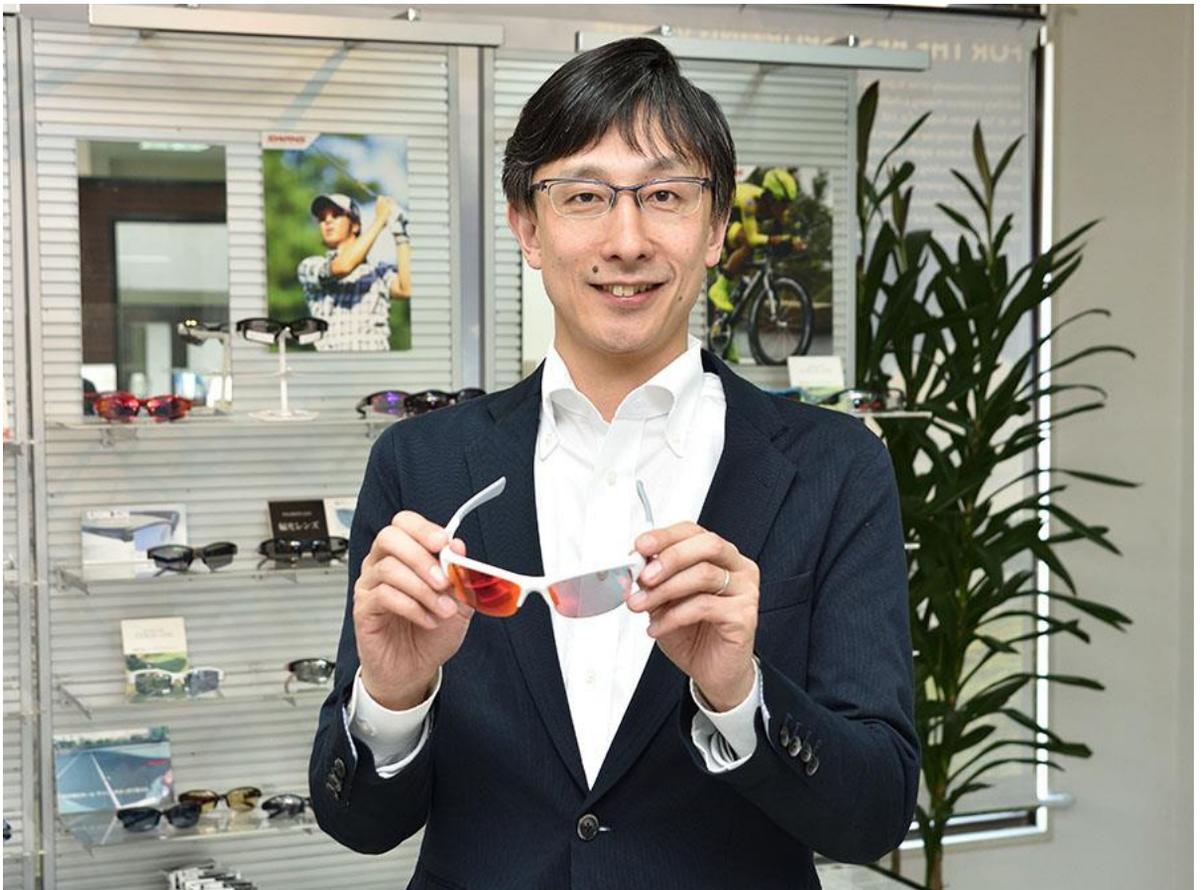
2021年に開催された東京五輪では、卓球・水谷隼選手がSWANSのサングラスを着用してメダルを獲得した。

「屋内競技で視認性を高めるためにサングラスを着用するという、アイウェアの新たな可能性を切り開くことができました」強いライトの光を軽減してボールの動きを見えやすくするというレンズは大きな話題となった。



東京五輪で水谷隼選手が着用したE-NOX NEURON20 ‘（イーノックスニューロン・トゥエンティ）

「これからも技術力や特徴ある素材を持つ中小ベンチャー企業とどんどんタッグを組んでいきたい。共に日本のスポーツシーンを盛り上げていきましょう」——2024年パリ五輪に向けて、同社の挑戦は続いていく。



代表取締役社長 山本 直之氏

(取材・文／高橋武男)

山本光学株式会社

代表取締役社長

山本 直之氏

<https://www.yamamoto-kogaku.co.jp/>

事業内容／スポーツサングラス、産業用保護具の製造・販売